

人を幸せにするマナー

私達はみんな、多くの人の中で生活しています。

作法やしきたり（マナー）は、その人間関係が上手くいくようにと、長い歴史の中で培われてきた「智慧」の結集です。

作法やしきたりと言うと、堅苦しいイメージがあるかもしれませんが、確かに「やり方やルール」を覚えて実行しようとする、相手にまで気が使えなかったり、その場の雰囲気味わえなかったりと、本末顛倒になりかねません。

「なぜこうするのか」に目を向け、美意識を持つことで、立ち振る舞いや所作が身に付いていきます。そうすることで、どのような場にも自信を持って臨めるようになります。

作法は、相手に不愉快な思いをさせないための「基準」にすぎません。逆に言えば、相手の気持ちを大事にしてよい雰囲気であれば、やり方にこだわらなくていいのです。



「ご存じの方も多いでしょうが、一流の心遣いとして語り継がれる逸話があります。英王室の宴席で、賓客が間違えて、指先を洗うフリンガーボウルの水を飲んでしまいました。すると、エリザベス女王は、お客様に恥をかかせまいとし、自分も平然とフリンガーボウルの水を飲み干したのです。

「こんなの常識でしょ、知らないの?」と、誰かを傷つけることがあれば、それこそがマナー違反となってしまいます。とっさの状況にも柔軟に思いやりのある行動ができるようになる、そんな素敵な人を目指したいと思います。

マナーは時代と共に変わっていきます。例えば、「男らしく、女らしく」が作法の基本で常識でしたが、多様性の現代では、性別の「らしく」は禁句になりつつあります。けれども、時代が変わっても、人としての「あり方」は変わらないものです。言葉だけに捉われず、その奥にある「本質」を考えることによって、使い分けをしていくのが良いのではないのでしょうか。そのようにしていかないと、「常識」を間違え、大事なことを失ってしまうこともあると思います。

マナーは、正しい、正しくない、という是非を問うようなものではありません。最も重要なことは、相手にとって失礼にあたらないように、「相手の気持ち」や「その場の雰囲気」を優先することです。その心遣いは、あなたの品格となって、自分の人生を豊かにするだけでなく、周りの人の心も豊かになることでしょう。



◆なぜ日本人の礼儀作法は称賛されるのか◆

相手をおもいやる 心と心のやりとりから 生ずる動き

外国人旅行者の増加や、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の発達により、日本という国の独特な魅力が、世界中に発信され注目を集めているが、日本人の「おもてなし」の精神もその一つだ。なぜ日本人は、世界が驚くような作法ができるのか。大学教育において礼儀・作法・マナー・エチケットなどの広義の「礼儀」について指導・研究を行なっており、深い見識がある柴崎直人氏に話を聞いた。

学校教育では道徳を 絶対に教えなければならぬ

——柴崎先生が総師範を務められている小笠原流礼法について教えてください。

柴崎 小笠原流礼法とは、室町時代から続く武家の礼法で、日本の礼儀作法の源流と言われている内の一つに当たります。

簡単に言えば、小笠原さんという武士の家の教えでした。当初は「弓

しばぎきなとお 柴崎直人

小笠原流礼法総師範、岐阜大学
大学院准教授

1989年学習院大学文学部心理学
学科卒業。筑波大学大学院教育
研究科カウンセリングコース修
了。中部学院大学准教授を経て、
現職。著書『日本の礼儀作法・
しきたり』『正しいビジネスマ
ナー』（PHP 研究所）、『礼儀・マ
ナー教育概論』（培風館）など。



馬礼」と言って、弓の技術、馬乗りの技術、そして対人コミュニケーションなどの教えがありました。

上級の武士であれば、かぶらや 鎗矢を打つ役目（馬に乗りながら開戦の合図となる矢を打つこと）があったので、